

実習を振り返って—授業デザインと教師行動—

応用言語学講座 M2

飯田理恵子

1. 授業デザイン

1.1 導入語彙・表現を考える

自分の授業で導入した語彙・表現を振り返ると、もう少し量を増やしても良かったのではないかと思う。また、授業の計画を立てる段階で、取り上げる場面ではどのような語彙がよく使われ、その中でもどの語彙が重要なのか、ということをもう少しよく考えておくべきであった。

1.2 提示する談話を考える

今回の実習で自分が提示した談話は、ある場面の談話における非常に短い一部分であった。学習者のレベルもそれなりに高かったので、もっと談話のバリエーションを増やしたり、文脈を伸ばしたりした方が良かったと思われる。

1.3 タスクを考える

自分の授業で行ったタスクは、あまり自由度の高いものではなかった。今回の実習では、学習者がアドリブを使うなどして、たまたま自由度の高い作業になったので良かったが、もし言われたことしかやらないタイプの学習者ばかりが集まっていたら、機械的なやり取りしか行われないタスクになっていたであろう。

また、今回の実習では、興味を引くタスクを考えることに注意が傾き、タスクと授業目標とのつながりを考えることがおろそかになっていた。今後は、ただ単に盛り上がるタスクを考えるのではなく、授業目標とのつながりを意識しながら、より自由度の高いタスクを考えるようにしたい。

1.4 導入の仕方考える

教案を考えるに当たって悩んだことの一つに、導入部分でどのように学習者を引きつけるか、ということがあった。私は、「～てもよろしいでしょうか」を導入する際、インパクトを与えるために「くま君と先生」という場面設定で導入したのだが、二点反省すべきことがある。まず、「くま君」の演技をする時、もっと役になりきるべきであった。導入部分は、学習者を授業に引きこむきっかけとなるので、今後は思いっきりやりたい。また、二点目の反省として、今から何を学習しようとしているのか分かりにくい導入となってしまったことが挙げられる。教師は、何に気付いてほしいのかを考えながら導入するべきである。ここでは、丁寧な表現を導入したかったので、「くま君」の話し相手が「友達」ではなく「先生」であることに注目させるべきであった。従って、「くま君は誰に話していますか。」などの提示質問を与えると良かったであろう。

1.5 ティームティーチングにおける自分の位置付け

ティームティーチングの場合、教師同士の打ち合わせが非常に重要である。教師達は、その日学習者に何が出来るようになってほしいのか、その為に各担当部分では何をするのかということを明確に把握する必要がある。しかし、多忙な中での実習だったため、全ての授業を十分に話し合うことができなかった。今回の実習で、最低でも何を話し合うべきなのかということが分かったので、今後に活かしたい。

2. 教師行動

2.1 学習者とのインターアクション

自分の指示質問を振り返ると、学習者の情報を引き出すような本当の意味の指示質問が少ない。今後は、クラスの雰囲気をもっと良くするためにも、指示質問を増やし、学習者とのインターアクションを活発に行いたい。

2.2 学習者をよく見る

今回の実習を通して、学習者をよく見ることの大切さがよく分かった。学習者をよく見ることによって、教師は学習者の細かい発話を拾い、そこからインターアクションを増やすこともできる。もちろん、学習者の発話全てを取り上げることは、時間の

都合上無理かもしれないが、学習者の発話意欲を高める為にも、せめて反応はすべきであろう。

また、学習者の様子から、教師が聞き逃してしまった学習者の発話などに気付くこともある。今回の実習では、学習者をよく見る余裕があまり無かったが、今後教壇に立つことがあれば、学習者をよく見ながら授業を行いたい。

2.3 冷静な対応

実習中の最大の失敗として挙げられるのが、学習者から想定外の誤りが出た時に、焦って適切なフィードバックを与えることができなかったことである。その場ですぐに詳しく説明できないのなら、後日改めて教えることもできる。とにかく、想定外のことには焦る必要は無いのだと分かった。

3. 教師としての自分を振り返って

教師としての自分を振り返ると、授業中の自分と普段の自分があまり変わらず、とても自然であったようである。このような、「教師っぽくないところ」は長所でもあり短所でもあると思われる。今後教壇に立つ時は、今の自然さを残しつつ、教師として意識すべき所は意識して授業を行いたい。